

会員の最近の刊行物紹介

○ 「瓢湖の白鳥物語り」吉川繁男著

瓢湖に白鳥が渡来してから25年、故吉川重三郎氏がはじめて人工給餌に成功してから21年になる瓢湖の白鳥の歴史と近況、著者が二代目を受けついで以来の経験と業績、提言と主張などA5版400ページにまとめたもの。

発行所、三省堂、頒価1,000円。

○ 写真集「日本の白鳥」

松井 繁 著 発行所 善隣

札幌市桑園中央病院長の著者は写真家としても知られ昭和32年以来、北海道、東北、北陸、山陰と白鳥の渡来する湖沼を根気強くカメラ行脚、写真集「日本の白鳥」として集大成された。

B4判144ページ（内カラー26ページ）マットアート、上製本、頒価18,000円、本会員の場合は送料共15,000円。本会事務局ではありません。

以下 著者のことばから

「昭和32年10月、北海道の根室原野のシラルトロ湖で、薄暮のなかに浮かぶ白鳥を見た。これが私と白鳥との出会いであった。その白さが私をひきつけ以来17年間、私は白鳥を撮りつづけた。

知床連山の初冠雪が目にしみる10月ごろ、サハリンから北海道のオホーツク沿岸を南下して瀧沸湖に白鳥が渡ってくる。クッチャロ湖、風蓮湖、秋田の八郎瀨、新潟の瓢湖、島根の中海へと、冬の間、私の白鳥を追う旅が続く。

そして春5月、再び北上した白鳥は最北端の

渡来地から、牧舎のサイロを越えオホーツクの海へ消えていく。再会を期して別れの手を振る悲しい時である。

○ 「猪苗代湖に渡来する「ハクチョウ類」についておよび「渡り」に関する一考察」

大森 常三郎 著

著者は老練な獣医学士であると同時に日本山岳協会第一種登山指導員でもある。

したがって白鳥の渡りに関し生物学的、気象学的観点から、従来見られなかったダイナミックな新説を展開しており、内外から注目されている。

同書の「要約」から

猪苗代湖に渡来する「ハクチョウ類」の数は、最近の10年間に急激な増加をみているが、このレポートは今日までの経過と実態を述べ将来への記録とするとともに他の渡来地と異った環境と立地条件のなかで、観察を続けてきた結果を、現在知られている文献と対比して、その相違点を解説した。

すなわち「ハクチョウ類」の渡りは、季節風によって行われる。また長距離の移動もまた同様に、好む方向の風に乗って行なわれる。として従来考えられていない部分について、観察記録をもとに天気図と照合し「渡りの行動」についての理解を容易にした。B5版34ページ、自費出版

○ 「瓢湖の水」 佐藤貞太郎 著

著者は瓢湖の地元新潟県水原町の前町長。

「瓢湖の水の第一の汚染源は渡来する水鳥のフンと茶ガラ、シイナ、パンクスなどの長年の堆積による」とし、その浄化対策として「瓢湖の通年のしゅんせつ、フラッシング用水の導入」を提唱している。B5版、62ページ、

発行所 瓢湖の白鳥を守る会

頒 価 300 円送料 150 円

○ 「白鳥」No. 1～No. 7

北海道網走市立北浜小中学校刊 B5版各30ページ程度

1969年(S44)以来、北浜中学校教諭玉田誠氏の指導で瀧沸湖の白鳥の保護活動と観測研究活動を続けてきた、小中学校の組織的な成果を年次ごとにまとめたもの。

正確な観察記録を多様な図表やグラフ等により科学的に示そうとしており、日本の小中学校における理科教育の一つの成果として水準を抜く資料。

○ 「苫小牧の白鳥」総集版

苫小牧市白鳥保護委員会編

昭和36年に苫小牧市白鳥保護委員会を結成以来のウトナイ湖の白鳥の研究保護活動の集大成。昭和35年以来「白鳥調査報告書」として第3集までを出し、このたび第4集を総集編としてまとめた。過去15年間の克明な観察記録と白鳥の事故についての記録、白鳥解剖所見、ウトナイ湖白鳥飛来表、白鳥保護委員会事業報告など登載。

以下、観察記録から

S44・3・19の気温+1～-14。天候

風位 無。羽数240 内幼35。「11

時、165羽点々と餌をとっている。14時頃美々川入口下流200メートル位のところでワシが何か赤いものを食っているようなので、入口まで行ってみる。白鳥を二つ裂きにして食っている。ワシ2羽で2時間位もかかって食ってしまった。他にワシ4羽見える。」B5版155ページ。非売品。

その他の刊行物

本会会員で本会設立以後に、白鳥に関する著書、刊行物、写真集等がありましたら、左記様式によってお知らせください。逐次本紙で紹介させていただきます。なお、本会会員で本会設立以前に白鳥に関する刊行物があり、かつ残部がある場合は、同様お知らせください。

記

1. 著作名
2. 著作者氏名
3. 体裁
4. 発行所名
5. 頒価送料
6. 内容の要約

以上、400字程度にまとめ本会事務局あてお送稿ください。